# 12 俵　万智『短歌をよむ』

うつそみの人なるや明日よりはをとわが見む　（巻二・一六五）

の上にふるあしびをらめど見すべき君がありといはなくに　（巻二・一六六）

この世の人である私は、明日からは、弟の葬られている二上山を、弟として見続けましょう……。

①「うつそみの人なる吾や」は強烈だ。生きているかぎりだれだって、この世の人であるわけだが、「ああ、私はこの世の人なんだ」という認識は、かなりⓐトクイなものだろう。まるで、心はあの世にいってしまい、その心が、この世に残された肉体を眺めているような表現である。

実際、のこれからの人生は、弟のことを思い続けることだというのだから、心はあの世にいっていると考えてもおかしくはないかもしれない。「わが見む」と強い意志で結ばれている。

次の歌は、はっきりと弟の死を悲しむ心が感じられる。

岩のほとりにえているを手折ろうと思ってみても、その花を見せたい君がこの世にいるとはだれも言ってくれません……。

もう一度、歌を読みかえしてみると、ほとんどなんの技巧も使われていないことに気づく。悲しみに突き動かされるようにして生まれてきた歌には、ⓑシュウジなど必要なかったのだろう。

②これほどの悲しみを、短歌というかたちにすること自体、非常に大変なことだったと思われる。が、逆に五七五七七というかたちがあったからこそ、大伯皇女は悲しみを表現できたのではないか、とも思う。

五七五七七に言葉を集めるという「とっかかり」がなかったら、とてもまとめきれない思いが、彼女の胸のうちにはれていたことだろう。それが、結晶のように言葉としてあらわれる過程において、定型の果たした役割は大きかったと思う。もし、このときの心境を、大伯皇女が日記に書いたとしたらどうだろう。次から次へと悲しみの言葉が連なり、収拾のつかないものになっていたのではないだろうか。読むほうとしても、気の毒だとは思うけれど、たぶん共感するのはむずかしい。

短歌にするということは、③非常に主観的な感情を、④一度客観の網にくぐらせるということである。主人公の自分を見つめるもう一人の自分がいなくては、定型にしあげることはできないだろう。「うつそみの人なる吾や」という表現など、外側から自分を見つめる目がなくては、とうてい生まれてこない。そしてそういう過程があるからこそ、主観的な感情が、ⓒフヘン性を持ち、今でも私たちの心にⓓトドくのではないかと思う。

問1　二重傍線部ⓐ〜ⓓのカタカナを漢字に直せ。（3点×4）

ⓐ〔　　　　　　　〕　ⓑ〔　　　　　　　〕

ⓒ〔　　　　　　　〕　ⓓ〔　　　　　　く〕

問2　傍線部①「『うつそみの人なる吾や』は強烈だ」とあるが、その理由として最も適当なものを次から選べ。（7点）

ア　自分を絶対に死なないものとしてとらえているような表現だから。

イ　生きている自分を死んだ者の目でとらえているような表現だから。

ウ　今生きている自分はもうすぐ死ぬのだと述べている表現だから。

エ　自分は生きているのだという喜びを素直に述べている表現だから。

〔　　　〕

問3　傍線部②とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次から選べ。（7点）

ア　言葉で言いつくせない悲しみを、普通の言葉で表すということ。

イ　静かな悲しみを、動的で平明な言葉で表すということ。

ウ　熱い涙があふれてくるような悲しみを、冷静に言葉で表すということ。

エ　大きな悲しみを、五七五七七という短い言葉で客観化して表すということ。

〔　　　〕

問4　傍線部③「非常に主観的な感情」とあるが、どのような感情をいうのか。その具体的な内容として最も適当な語句を、本文中から十字以内で抜き出せ。（8点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　〕

問5　傍線部④とあるが、「客観の網」を言い換えた表現を、本文中から二つ、それぞれ十字以上十五字以内で抜き出せ。（8点×2）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

練習問題〈近現代文学史〉

次の作家の作品をそれぞれ後から選べ。

①　 　（　　　）

②　 　（　　　）

③　子　　（　　　）

④　 　（　　　）

⑤　　（　　　）

⑥　 　（　　　）

⑦　 　（　　　）

⑧　　　（　　　）

⑨　　　　 （　　　）

⑩　 　（　　　）

ア　みだれ　　 イ

ウ　い　　 エ　はである

オ　　　 カ

キ　の　　ク

ケ　のにて　　コ　の

【解答】

問1　ⓐ特異　ⓑ修辞　ⓒ普遍　ⓓ届（く）

問2　イ

問3　エ

問4　弟の死を悲しむ心（8字）

問5　・自分を見つめるもう一人の自分（14字）

　　　・外側から自分を見つめる目（12字）

【練習問題解答】

①オ　②エ　③ア　④ケ　⑤ク　⑥コ　⑦ウ　⑧カ　⑨キ　⑩イ

【50字要約例】

短歌の五七五七七という定型は、主観的な感情を客観的視点から見つめなおし、普遍性を与える役割をする。（49字）

▼補充設問▲

（本文16行目の「[とっかかり]」を空欄にして）

問　空欄に入る語句として、最も適当なものを次から選べ。

　ア　ベース　　イ　やりくり　　ウ　とっかかり　　エ　プロセス

　答え　ウ

問５　の追加

傍線部④「一度客観の網にくぐらせるということである」とあるが、そうすることによってどうなると筆者は考えているのか。最も適当な箇所を本文から三十字以内で抜き出せ。

　答え　主観的な感情が、普遍性を持ち、今でも私たちの心にトドく。（28字）　　＊「届く」も可。